唐代仏教石刻文の研究（一）

大内文雄

はじめに

唐代仏教石刻文を解読する際に当研究班が採った方法は、原拓、或いは影印が存在し、それによって文字資料としての原形が確認し得るものを対象とすることであった。一九九八年度においては、比較的に短文の塔銘、墓誌等に解読の対象を絞り、都合一五種を選んだ。ただしこれらの中で、貞観一八年の楊居士塔銘は欠損による解読不能の部分が多いために、今回は掲載せず、浄業塔銘（開元一二年）、景賢身塔石記（開元二三年）、義福塔銘（開元二四年）は一九九九年度の報告に予定している隆闡法師碑と大智禅師義福碑に関連するものとして掲載したいと考えている。いずれも紙数の制限による措置でもある。以上を除いた一一種が左記となる。稀に行書の風を含むものがあるが、全て楷書である。なお、各担当者によって毎回作成配布された研究会資料には詳しい語注が含まれていたが、これらも紙数の都合で全て割愛せざるを得なかった。

一、　済度寺尼法楽墓誌銘　　永隆　二年（六八一）　一九行、行一九字
二、　済度寺尼法灯墓誌銘　　永隆　二年（六八一）　二〇行、行一九字
三、　比丘尼法琬法師碑　　景龍　三年（七〇九）　三〇行、行五四字

四、崇義寺思言禅師塔銘　開元二年（七一四）　二三行、行二一字
五、六度寺侯莫陳大師寿塔銘　開元二年（七一四）　五三行、行二〇字
六、浄域寺法蔵禅師塔銘　開元四年（七一六）　三六行、行三〇字
七、大薦福寺思恒律師誌文　開元一四年（七二六）　二八行、行二八字
八、□義寺敬節法師塔銘　開元一七年（七二九）　二六行、行二三字
九、興聖寺尼法澄塔銘　開元一七年（七二九）　二五行、行三二字
十、大安国寺尼恵隠塔銘　開元二六年（七三八）　二八行、行一八字
十一、優婆夷未曾有功徳塔銘　開元二六年（七三八）　二七行、行二四字

次に、これらの内容の概略を記しておきたい。一、二の墓誌、三の碑を除けば他はすべて塔銘である。また全一一種の中、一、二、三、五、九、十は尼、十一は優婆夷のものとなっている。

一、二の法楽・法灯は、唐太宗期における南朝系名族の代表者である蕭瑀の長女と第五女である。南朝梁の武帝衍・昭明太子統に連なり、且つまた西魏・北周、隋の附庸国であった後梁の王統を継ぐ一族の代表者でもあった蕭瑀が、仏教信仰に篤く、ために太宗から譴責を受けたことや、唐代初期の蕭氏から多くの事跡の明らかな出家者が輩出し、また蕭瑀を中心とするその一族が法華経の信仰面において著名であったこと等、愛宕元氏の専論[1]もあり、夙に知られているところである。法灯の方が早く総章二年（六六九）相好寺に没し、法楽が咸亨三年（六七二）に同寺に没した後、永隆二年に雍州明堂県に帰葬されている。この墓誌によれば、法楽は弥勒信仰を持ち、妹の法灯にはその銘に西方往生の信仰があったように記されており、単なる修辞の可能性はあるものの、蕭氏一族の法華経崇敬の中で、姉妹それぞれに異なる往生観を持っていたとすれば、当時一般の信仰形態の一例として興味深い。

三・法琬碑は今回唯一の碑である（西安碑林に存す）。碑文によれば、法琬の家は唐の太祖景皇帝李虎の子の鄭王亮から始まり、祖父はその子の襄邑王神符、父は臨川公徳懋である。高宗の永徽六年（六五五）に神符が没すると、亡父追善のためとして息女の出家を高宗に請い、勅許された。法琬この時一三歳という（但し没年の垂拱四年－六八八－から逆算すると一三歳は永徽三年となり合わない）。またこの時、同時に「家人」二一人を度し法琬の弟子に充てたと言う。宗室の子女の出家の実態を示す部分である。勅許時の高宗の言葉に「孝道の憑るところにして、諒に冥福に資す」とあるように、儒教倫理と仏教における追善供養の融合した姿を示し、またこの時が則天武后の立后の年であることも注意される。また法琬の塔は、彼女の没後二一年の景龍三年（七〇九）に中宗の勅をもって長安南郊の神禾原に起てられたが、碑文の初めに、中宗、すなわち「応天神龍皇帝の三従姑なり」とあるのも、中宗復辟後のこの時、唐宗室の一員に連なる女性であることを強調する意図があろう。なお法琬所住の寺はその母方の祖である北周の尉遅綱（尉遅迥の弟）の建立と言う。[2] 西魏北周以来の北族系名族と仏寺との関係を示す一例である。

以上の一・法楽、二・法灯、三・法琬、は名族或いは宗室の女性であったが、これらの他にも、名族出身の者に范陽の盧氏を出自とする八・僧敬節と、十一・優婆夷未曾有があり、また五・侯莫陳大師寿塔銘に記される、彼のために三層の塔を起てた无上比丘尼姉妹は河東聞喜の裴氏である。

墓誌・碑銘等においては、帰葬の際に「礼也」と記されるのが通常である。この一一種においても法楽墓誌・法灯墓誌・優婆夷未曾有功徳塔銘がその例を踏襲するが、敬節塔銘だけは「律也」とする。これもまた唐代仏者の塔碑銘等にしばしば見られる「礼也」に代わる表現である。しかし一一種全体で言えばそう言った表現がないものが殆どであって、かえってこれらの世間の例を踏まぬものが仏教石刻文の一特徴とも言えよう。但し、今回割愛した義福塔銘は「礼也」としている。

ところで五・侯莫陳大師寿塔銘、七・大薦福寺思恒律師誌文、十一・優婆夷未曾有功徳塔銘はいずれも禅に関係する。

その中で五、七の二種は神秀に関わり、十一は義福に関わる。また九の興聖寺尼法澄塔銘は華厳の賢首法蔵に関係する。以下、これらの概略を述べておきたい。

五は「六度寺侯莫陳大師寿塔銘」と言うものの、その文によれば、法名は智達であって、俗姓が侯莫陳、諱は琰之である。侯莫陳は北姓である。このように俗姓を大師に冠する例は少ないと思われる。塔銘には彼の没年が記されず、従って二〇歳で嵩山に入って初めに安阿闍梨に、次いで「晩くに秀和上に帰す」こと二〇余年と言う記事も甚だ明確さに欠くが、崔寛の撰になるこの塔銘の冒頭に師子尊者にいたる二四祖と達磨禅師を言い、銘に「裴氏比丘」と呼ばれている比丘尼姉妹によって起塔された年が開元二年（七一四）であることから、秀和上とは神秀であろう。裴氏出身の比丘尼姉妹の記事は、所謂北宗に属する名族出身の尼僧の存在を知る一例である。

七の思恒は高宗の咸亨元年（六七〇）に二〇歳で具足戒を受けているが、その前、恩度をもって出家している。この契機を与えたのが、当時地婆訶羅の訳場に証義大徳として太原寺（恐らく長安の西太原寺）に迎えられた薄塵法師である。思恒自身も、後に大薦福寺の義浄の訳場において、師と同じく証義の任をつとめている。思恒は次いで懐素の講筵に連なって律を学び、三転して神秀のもとに参じており、このように教・律・禅の三学に通じて、武后期に活躍した人物である。誌文中に、彼が建て、没後その東に葬られたと記す長安神禾原の塗山寺には、中宗の景龍年間（七〇七-七一〇）にその上座となった大福がおり、この大福も神秀の弟子であり、[3] 従って北宗の人々との密接な関係が窺えよう。しかし彼の本分は、中宗の時に内道場に入って菩薩戒師となり、十大徳に充てられて「天下の仏法僧事を統知」したとあるように、あくまでも律師としてのそれにあった。思恒律師誌文は比較的に短いものであるが、以上のように、武后期から玄宗朝開元期前半までの訳経、律学、禅学、或いは十大徳の問題[4]等についての注意すべき史料の一つである。

十一は范陽の盧氏出身の優婆夷の塔銘である。未曾有はその諱で、題名に言う実信に関して文中に示唆するものはないが、法号であろうか。二二歳で早逝したが、その生前は大智禅師義福を宗師とした。塔銘に、九歳から「経師」に従

って経典を諳じ、後には千手千眼尊勝陀羅尼を誦すこと巨億と言うように、禅門に親しみつつ陀羅尼の読誦を行う、唐代開元期の女性の信仰形態を教えてくれる一例である。

九の尼法澄は高宗の上元二年（六七五）に三六歳で出家し、塔銘には「至相寺の康蔵師の処において法を聴く」とある。この康蔵師とは康蔵国師と呼ばれた華厳三祖・賢首法蔵である。法澄は、皇太子時代の玄宗の喜捨によって修理された興聖寺に華厳経変を描き、また華厳疏義三巻を抄したというように、一貫して華厳経の教学と信仰を保持している。但しこの尼僧は、則天武后の如意元年（六九二）に謀議に加わったとされて官に没せられ、中宗復辟後に釈放されたという経験を持つ。その後は中宗・睿宗朝に紹唐寺、興聖寺の寺主にいずれも勅補されている。法澄には嗣彭王李志暕の女の弥多羅という弟子がおり、この塔銘の撰文と書は李志暕その人であるから、法澄は唐の宗室に密接な関わりを持っていたのであろう。塔銘に現れる蔣王が上元年間に武后によって自殺に追い込まれた太宗の第七子李惲であり、汝南（王）が垂拱年間に武后に殺された李惲の子の煒であるならば、或いは法澄は蔣王家ゆかりの者であった可能性も出てこようが、今のところは不明としておくより他ない。

最後に四・思言塔銘と六・法蔵塔銘、十・恵隠塔銘であるが、特に法蔵塔銘は三階教に関わる石刻史料として、既に早く矢吹慶輝『三階教之研究』に紹介されているものである。思言の塔銘には直接に三階教に関わる文面が現れているのではないが、親族の僧及び道俗が収骨起塔した場所が「終南（山）楩梓谷・大善知識林の後の本師の域」であったことに注目される。楩梓谷は三階教の信行の塔院の所在地でもあり、『三階教之研究』にも言うように、高僧所住の地として著名であった。恵隠は望族の出身であるが、またその所住の寺である大安国寺にも注意される。長安長楽坊の東側を占める大寺院であったこの寺は、景雲元年（七一〇）睿宗の即位の年に、睿宗在藩の時の旧宅を寺としたことに始まる。大安国寺の名がしばしば現れるようになるのは玄宗朝以後と言ってよく、恵隠は早い例に属する。

以上、一一種の塔碑銘は、すべてが明確な方針のもとに選択されたものではなく、専ら様々な変化に富む石刻史料を

読むという至極単純な動機から出発して研究班の組上に乗せられた。それは次年度に予定している、より長文の碑銘を解読して行くための準備としての意味をも持たせて選ばれたものである。以下に掲げる各塔銘の訓読は、担当者それぞれの個性によって少しずつ異なっており、釈文・訓読の改行も、ほぼ当初案によっている。できる限り表現の不一致が起こらぬように注意したが、難解な箇所を含め、読みづらいところが少なからずある。そうした難点を解消して行くことも、今後の課題となる。

最後に表記上の原則について一言しておくと、釈文の方は異体字・俗字等も含め基本的に正字で統一し、訓読には常用漢字を用いる。ただし意を以て原字を残した箇所も若干ある。また銘の部分に時折登場する「其一」等は、原碑では一格に二字を横書に収める形になっているが、本報告ではみな地の文の上に出し、一字一格を当てた。なお、各塔銘の解読担当者の氏名は、それぞれの末尾に括弧を付して示した。

注

1　「隋末唐初における蘭陵蕭氏の仏教受容―蕭瑀を中心として―」（福永光司編『中国中世の宗教と文化』京都大学人文科学研究所一九八二）所収

2　この法琬所住の寺に関して、小野勝年編『中国隋唐長安寺院史料集成』（法蔵館　一九八九）には、褒義寺の項に、法琳の弁正論巻四や長安県志巻二二を用いて尉遲綱の捨宅建寺を紹介するが、そこに法琬碑は用いられていない。また八・□義寺敬節法師塔銘について、その寺名は褒義寺ではないかという議論もあったが、明確には決定されなかった。

3　陸海撰「大唐空寂寺故大福和上碑」（『唐文続拾遺』巻三）。柳田聖山『初期禅宗史書の研究』第六章第三節注二〇を参照。

4　思恒律師誌文のこの箇所については、山崎宏『支那中世仏教の展開』第二部第五章六〇七頁に「勅選臨壇十大徳の類か」とし、「中宗時代に天下の僧務統括の爲に十大徳をおいたといふことは疑はしいと考へる」と言う。

一　済度寺故比丘尼法楽墓誌銘

〔釋文〕

大唐濟度寺故比丘尼法樂法師墓誌銘幷序

法師。諱法樂。俗姓蕭氏。蘭陵人也。梁武皇帝之五／代孫。高祖昭明皇帝。曾祖宣皇帝。祖孝明皇帝。父／瑀。梁新安王。隨金紫光祿大夫。行內史侍郎。　／皇朝中書令。尙書左右僕射。特進。太子太保。上柱／國。宋國公。贈司空。赫奕蟬聯。編諸史諜。芳猷盛烈／可得而詳。法師則太保之長女也。勤懇之節。爰自／幼童。玄妙之體。發於岐嶷。年甫三齡。歸誠六度。脫／屣高族。落髮祇園。旣而禪室淪精。羈象心而有裕。／法場探祕。蘊龍偈而無遺。覺侶攸宗。眞門取範。而／念想云促。景落須彌之峯。福應斯甄。神升兜率之／殿。以咸亨三年九月十九日。遷化於蒲州相好之／伽藍。春秋七十有四。權殯于河東。以永隆二年歲／次辛巳三月庚午朔廿三日辛卯。歸窆于雍州明／堂縣義川鄉南原。禮也。恐松坰難固。栢榛終虧。式／鐫貞石。用勒芳規。廼爲銘曰。／

華宗襲慶。寶系承仙。爰誕柔質。歸心福田。功登十／地。業贊三天。神遊法末。覺在童先。喻筏俄捨。慈舟／遽捐。幽扉永晦。雅譽空傳。／

〔訓読〕

大唐済度寺故比丘尼法楽法師墓誌銘并びに序

法師、諱は法楽、俗姓は蕭氏、蘭陵の人なり。梁の武皇帝の五代の孫。高祖は昭明皇帝。曾祖は宣皇帝。祖は孝明皇

帝。父は瑀、梁の新安王、隋（隋）の金紫光禄大夫・行内史侍郎、皇朝の中書令・尚書左右僕射・特進・太子太保・上柱国・宋国公・贈司空。

赫奕の蟬聯なること、諸を史諜に編し、芳猷の盛烈なること、得て詳らかにすべし。法師は則ち太保の長女なり。勤懇の節は、爰に幼童よりし、玄妙の体は、岐嶷より発す。年甫めて三齢にして、誠を六度に帰し、屣を高族より脱ぎて、髪を祇園に落ろす。

既にして禅室に精を淪め、象心を羈ぎて裕かなること有り、法場に秘を探り、龍偈を蘊みて遺す無し。覚侶の宗ぶ攸にして、真門は範を取る。而して念想云に促されて、景は須弥の峯に落ち、福応斯に甄らかにして、神は兜率の殿に升る。咸亨三年九月十九日を以て、蒲州相好の伽藍に遷化す。春秋七十有四。権りに河東に殯し、永隆二年歳次辛巳三月庚午朔廿三日辛卯を以て、雍州明堂県義川郷の南原に帰窆す。礼なり。松坰の固くし難く、栢榛の終に虧かんことを恐れ、式て貞石に鐫り、用て芳規を勒す。廼ち銘を為りて曰く、

華宗は慶を襲い、宝系は仙を承く。爰に柔質に誕まるるも、心を福田に帰す。功は十地に登り、業は三天を贊く。神は法末に遊び、覚は童先に在り。喩筏俄かに捨てられ、慈舟遽かに捐てらる。幽扉永えに晦く、雅誉空しく伝う。

（丸橋充拓）

二　済度尼法灯法師墓誌銘

〔釋文〕

大唐済度寺故比丘尼法燈法師墓誌銘幷序

法師。諱法燈。俗姓蕭氏。蘭陵人也。梁武皇帝之五／代孫。高祖昭明皇帝。曾祖宣皇帝。祖孝明皇帝。父／瑀。梁新安王。隨金紫光祿大夫。行内史侍郎。　／皇朝中書令。尚書左右僕射。特進。太子太保。上柱／國。宋國公。贈司空。崇基茂趾。國史家諜詳焉。法師／即太保第五女也。年甫二八。脩行四諦。膏澤無施。／鉛華靡飾。精誠懇至。慕雙樹之高蹤。童子出家。殊／柏舟之自誓。具戒無闕。傳燈不盡。姉弟四人。同出／三界。華臺演妙。疑開棠棣之林。成等至眞。還如十／方之號。豈□法輪纔轉。道器先摧。以總章二年十／月五日。遷化於蒲州相好寺。春秋卅有九。權殯于／河東縣境。以永隆二年歲次辛巳三月庚午朔廿／三日辛卯。歸窆於雍州明堂縣義川鄉南原。禮也。／恐陵谷貿遷。田海變易。式題貞礎。用紀芳猷。乃爲／銘曰。／

丞相輔漢。司徒佐唐。功格天下。奄有大梁。暨茲令／淑。爰慕武皇。家風靡替。法侶成行。慈雲比影。慧炬／傳光。中枝犯雪。小葉摧霜。未登下壽。忽往西方。一／超慾界。千載餘芳。／

〔訓読〕

大唐済度寺故比丘尼法灯法師墓誌銘并びに序

法師、諱は法灯。俗姓は蕭氏。蘭陵の人なり。梁武皇帝の五代の孫。高祖は昭明皇帝。曾祖は宣皇帝。祖は孝明皇帝。父は瑀、梁の新安王、随（隋）の金紫光禄大夫・行内史侍郎、皇朝の中書令・尚書左右僕射・特進・太子太保・上柱国・宋国公・贈司空。崇基・茂趾は、国史・家諜に詳らかなり。法師は即ち太保の第五女なり。年甫めて二八にして、四諦を脩行し、膏沢は施すこと無く、鉛華は飾ること靡し。精誠なること懇至にして、双樹の高蹤を慕い、童子に出家して、柏舟の自誓を殊にす。具戒闕くる無く、伝灯尽きず。姉弟四人、同に三界を出ず。華台に妙を演ぶること、棠棣の林を開くに疑え、成等の至真なること、還た十方の号の如し。豈に□、法輪纔かに転ずるのみにして、道器先ず摧かるるとは。総章二年十月五日を以て、蒲州相好寺に遷化す。春秋三十有九。権に河東県境に殯し、永隆二年歲次辛巳三月庚午

朔二十三日辛卯を以て、雍州明堂県義川郷南原に帰窆す。礼なり。陵谷貿遷し、田海変易するを恐れ、式て貞礎に題し、用て芳猷を紀す。乃ち銘を為りて曰く、

丞相漢を輔け、司徒唐を佐け、功、天下を格し、大梁を奄有す。茲の令淑に暨びて、爰に武皇を慕い、家風替わること靡くして、法侶行を成す。慈雲影を比べて、慧炬光を伝え、中枝雪に犯され、小葉霜に摧かる。未だ下寿に登らざるに、忽ち西方に往き、一たび慾界を超えて、余芳を千載にす。

（丸橋充拓）

三　□□寺故比丘尼法琬法師碑

〔釋文〕

大唐□□寺故比丘尼法琬法師碑　　靈安寺沙門承遠撰／

若夫瑤水之濱。歌白雲而長往。玉臺之上。乘綵霞而不還。敬姜布闔門之規。斑姫光中禁之□。□□□□。參差異轍。猶且播芳徽於□□。□□／實於紫書。豈如開八正門。去塵離俗入三乘藏。鈎深致遠。喩栰於愛河之水。傳燈於昏衢之地。見之於法師矣。

法師諱法琬。俗姓李□□□□／道人也。　　應天神龍皇帝之三從姑焉。原夫馬喙高丘。彰白雲之茂祉。龍光函谷。表紫氣之仙望。清風映乎中古。大命集乎□□。　　／高祖　　景皇帝。道出鱗皇。功高羽帝。牢籠天地。運日月而揆陰陽。彈壓山川。驅黎甿而濟仁壽。曾祖故鄭王亮。謚曰孝。咸池別派。□□□／枝。乾垂帝子之星。坤列天孫之嶽。刻舟標智。岐巍已稱。毀鞍擅奇。仁心早茂。由是榮開朱邸。寵盛綠車。豐冠蓋之遊。列山河之郡。祖神符贈司／空。荆楊（ママ）

并三州大都督。上柱國。襄邑王。謚曰恭。潢漢天人。紫微帝系。大禹以能平水土。式叶帝兪。茂先以該博知名。允諧時望。惟楊奥壤。□□／雄藩。地枕荆門。郊通汝海。張皐蓋而按擧。褰彤襜而督察。去思來晩。德化長流。五袴兩岐。甿謠式著。九江士女。既聞酌□之詠。三晉人吏。還歌／戢兵之曲。父德懋。故金紫光祿大夫。少府監。宗正卿。兵部尚書。上柱國。臨川公。謚曰孝。爵列公侯。地隆勳戚。天分斗極。□□喉舌之榮。地括河／海。仍受股肱之寄。

法師生積善之門。誕象賢之室。風神外朗。慧敏內融。幼懷削髮之因。固拒結褵之義。臨川公寢苦在疚。風樹銜哀。莫申罔極／之心。徒結充窮之痛。去永徽六年。襄邑王薨。其年奉爲亡父。捨所愛之女。請度出家。　皇上以孝道所馮。諒資於冥福。誠心克著。□／展於香緣。奉　敕出家。時年十有三也。并度家人三七。並以充師第子。法師即隨故吳國公尉綱之外孫。其寺吳公之本置也。爾□／黄金布地。尙疑須達之園。白鶴成林。即是菩提之樹。日宮月殿。無晦無明。蓮座花臺。長春長夏。法師別置一院。以修道焉。苦行精心。與冰霜而／彌勵。戒範禪結。將竹栢而逾貞。地廼護珠。人惟杖錫。故得禪枝日茂。覺蘂年芳。忍鎧横霜。銛鋒穎而無極。戒珠含月。射光芒而自遠。至若貫花／散花之典。滿偈半偈之經。莫不呑若胸臆。如抵諸掌。至廼論堂霞闢。曳裓成陰。法座雲懸。飛錫連影。人同竹葦。衆若稻麻。法師明鏡伺鑒。洪鍾／佇扣。流言泉於玉吻。驚思風於牙扇。剖疑析滯。虛往實歸。固以聲華鍱腹。德高巢須。檀林擢秀。鹿苑騰芳。蓋玄門之棟梁。緇徒之領袖矣。方冀／濡足授手。長弘六度之津。覃思研精。永啓四禪之鍵。豈謂隙駒易往。藤鼠難留。若東魯之山頹。類西州之石折。教在運往。感息化窮。智炬由是／淪暉。堅林以之變色。以垂拱四年歲次戊子九月己酉朔日。遷神于□□寺。春秋卌有九。

惟法師襟神雅正。操履堅明。道在則尊。德高爲貴。法／堂宴坐。心可降魔。梵宇經行。影能馴鴿。高行鄰於初地。雅譽重於彌天。誠惟周拯。志尙高踏。至於六時清梵。想魚嶺而騰音。五夜馴行。候鯨鍾／而肅慮。楷模梵衆。雪凛冰清。導揚聾俗。雲歸海赴。清徒仰教。未極玄風。迅景不留。奄隨泡露。尼仙悟迦毗。即法師之姪女也。義均猶子。思承上／足。貞心雪皎。慧性霜凝。陶善誘而日深。沐慈風而歲遠。悲法眼之淪照。痛禪宇之摧梁。粤以景龍三年歲次己酉正月己未朔

十五日癸酉。奉／敕起塔于雍州長安縣之神禾原。禮也。崇構苕蕘。前臨黄嶠之曲。層基固護。却枕青城之隅。草凌晨而薤露晞。樹肅夜而松風起。以爲天長地／久。日月所以循環。露往霜來。陵谷以之遷貿。昔武成之室。勒徽範於貞碑。蜜陵之妃。昭媛德於豐琰。矧乎道高龍象。德隆鵷鷺。契無三之妙□。／入不二之元樞。豈可相質無聞。受辛莫紀。敢勒清風之頌。庶流終古之德。其銘曰。／

鶴林西變。像教東延。邈矣年祀。英靈罕傳。挺生明慧。惟我師焉。白雲凝祉。紫氣浮天。

奕。　　／帝緒蟬聯。誕乎令胤。克嗣先賢。聚沙之日。救蟻之年。仁心夙表。慧性俄堅。方釋塵累。遂託皇宗赫

良緣。心清鏡徹。戒潔珠圓。精誠苦行。雪凛冰鮮。三乘／洞曉。九部咸甄。時臨講肆。亟陟香筵。鵷鸞雜遝。龍象駢闐。

一楊辯囿。幾沐言泉。法門棟宇。覺海舟船。四蛇詎息。二鼠俄遷。輔仁莫驗。與善徒然。／式建高塔。爰臨古阡。南瞻豹巘。北瞰龍川。桑楡落日。松檟生煙。山風四起。隴月孤懸。一銘芬烈。三變桑田。／左衛翊壹府翊衛彭城劉欽旦書。／

景龍三年歳次己酉五月十日。比丘尼仙悟迦毗等建。／

〔訓読〕

大唐□□寺故比丘尼法琬法師碑　　霊安寺沙門承遠、撰す

それ瑤水の浜、白雲を歌いて長く往き、玉台の上、綵霞に乗りて還らず、敬姜は闔門の規を布きて、斑姫は中禁の□を光（おお）いにし、□□□□、参差して轍を異にす、猶お且つ芳徽を□に播き、□実を紫書に□するがごとし。豈に八正の門を開き、塵を去り俗を離れ、三乗の蔵に入り、深きを鈎し遠きを致すが如きならんや。愛河の水に喩栰し、昏衢の地に伝灯するは、之を法師に見るなり。

法師、諱は法琬、俗姓李□□□□道人なり。応天神龍皇帝の三従姑なり。原ぬるに、それ馬は高丘に喙し、白雲の茂祉を彰らかにし、龍は函谷を光らし、紫気の仙望を表し、清風は中古に映り、大命は□□に集まる。高祖景皇帝、道は

鱗皇より出で、功は羽帝より高し。天地を牢籠し、日月を運りて陰陽を揆り、山川を弾圧し、黎甿を駆りて仁寿を済う。曾祖故鄭王亮、諡して孝と曰う。咸池派を別ち、□□□枝、乾は帝子の星に垂れ、坤は天孫の嶽に列なる。刻舟して智を標げ、岐巍にして已に称えられ、毀鞍して奇を擅まにし、仁心は早に茂んなり。是に由りて栄は朱邸を開き、寵は緑車に盛んにして、冠蓋の遊に豊かにして、山河の郡を列ぬ。祖神符、贈司空・荆楊（ママ）并三州大都督・上柱国・襄邑王、諡して恭と曰う。潢漢の天人、紫微の帝系、大禹は能く水土を平らぐるを以て、式て帝兪に叶い、茂先は該博にして名を知らるるを以て、允に時望に諧う。惟れ奥壤を楊げ、□□雄藩、地は荆門に枕し、郊は汝海に通ず。皁蓋を張りて按挙し、彤襜を褰げて督察し、去思来晩、徳化長流し、五袴両岐、甿謡式て著われ、九江の士女は、既に□□の詠を聞き、三晋の人吏は、還た戢兵の曲を歌う。父徳懋、故金紫光禄大夫・少府監・宗正卿・兵部尚書・上柱国・臨川公、諡して孝と曰う。爵は公侯に列なり、地は勲戚に隆く、天は斗極を分かち、喉舌の栄を□□し、地は河海を括り、仍お股肱の寄を受く。

法師は積善の門に生まれ、象賢の室に誕まれ、風神外朗にして、慧敏内融、幼くして削髪の因を懐き、固より結褵の義を拒む。臨川公、苦に寝ね、疚に在り、風樹は哀を銜み、罔極の心を申す莫く、徒だ充窮の痛を結ぶ。去る永徽六年、襄邑王薨ず。其の年、奉じて亡き父が為めに、愛する所の女を捨て、度して出家せしめんことを請う。皇上以えらく、孝道の憑る所にして、諒に冥福に資し、誠心克く著われ、香縁に□展す、と。勅を奉じて出家す。時に年十有三なり。并せて家人三七を度し、並びに以て師の第子（ママ）に充つ。法師は即ち随（隋）の故呉国公尉綱の外孫にして、其の寺は呉公の本置くところなり。爾□、黄金地に布き、尚お須達の園かと疑い、白鶴林を成し、即ち是れ菩提の樹なり。日宮月殿、無晦無明、蓮座花台、長春長夏、法師別に一院を置き、以て道を修むるなり。苦行精心、氷霜と弥いよ励み、戒範禅結、竹栢と逾いよ貞しく、地は迺ち珠を護り、人は惟れ錫を杖つく。故に禅枝日々茂り、覚蕊年ごとに芳しきを得。忍鎧霜を横たえ、鋒穎を銛くして極まること無く、戒珠月を含み、光芒を射て自のずから遠し。貫花散花の典、満偈半偈の経

の若きに至りては、胸臆に呑むがごとく、諸れを掌に抵すがごときものならざるはなし。廼ち論堂霞闢し、裓を曳きて陰を成し、法座雲に懸かり、錫を飛ばして影を連ね、人は竹葦に同じく、衆は稲麻の若きに至る。法師は明鏡のごとく伺鑒し、洪鍾のごとく佇扣し、言泉を玉吻に流し、思風を牙扇に驚かす。疑を剖かち滞を析き、虚しく往き実もて帰る。固より声、鍱腹に華やかにして、徳、巣頂に高きを以て、檀林、秀を擢んで、鹿苑、芳を騰ぐ。蓋し玄門の棟梁、緇徒の領袖なり。方に濡足授手し、長く六度の津を宏め、覃思研精し、永く四禅の鍵を啓かんことを冀いしに、豈に隙駒往き易く、藤鼠留まり難きを謂わんや。東魯の山の頽るるが若きにして、西州の石の折るるに類す。教在れども運は往き、感は息み化は窮まる。智炬は是に由りて暉きを淪め、堅林は之を以て色を変う。垂拱四年歳次戊子九月己酉朔日を以て、□□寺に遷神す。春秋四十有九。

惟うに法師は襟神雅正にして、操履堅明、道在るは則ち尊く、徳高きを貴しと為す。法堂の宴座は、心、魔を降すべく、梵宇の経行は、影、能く鴿を馴らす。高行は初地に鄰し、雅誉は弥天に重んぜらる。誠は惟れ周拯、志は尚お高踏して、六時の清梵、魚嶺を想いて音を騰げ、五夜の馴行、鯨鍾を候ちて慮いを粛しむに至りては、梵衆に楷模すること、雪のごとく凛として氷のごとく清く、聾俗を導揚すること、雲のごとく帰し海のごとく赴く。清徒、教を仰ぐも、未だ玄風を極めず、迅景留まらずして、奄ち泡露に随う。尼仙悟迦毗は即ち法師の姪女なり。義は猶子に均しく、思は上足を承け、貞心は雪皎、慧性は霜凝たり。善誘に陶して日々深く、慈風に沐して歳ごとに遠し。法眼の淪照するを悲しみ、禅宇の摧梁するを痛む。粤に景龍三年歳次己酉正月己未朔十五日癸酉を以て、勅を奉じ、塔を雍州長安県の神禾原に起つ。礼なり。崇構苕蕘にして、前は黄嶠の曲に臨み、層基固護、却は青城の隅を枕とす。草は凌晨にして薤露晞き、樹は粛夜にして松風起こる。以為えらく、天長く地久しきは、日月の循環する所以にして、露往き霜来たるは、陵谷之を以て遷貿すと。昔、武成の室、徽範を貞碑に勒し、蜜陵の妃、媛徳を豊琰に昭らかにす。矧んや道、龍象に高く、徳、鵷鷺に隆く、無三の妙□に契い、不二の元枢に入る。豈に相い質して聞く無く、受辛紀すこと莫かるべけんや。敢えて

清風の頌を勒し、庶わくは終古の徳を流さん。其の銘に曰く、

鶴林西変し、像教東延す。邈かなるかな年祀、英霊伝えらるること罕なり。挺生の明慧、惟れ我が師なり。白雲祉に凝り、紫気天に浮く。皇宗赫奕、帝緒蟬聯、令胤に誕まれ、克く先賢を嗣ぐ。聚沙の日、救蟻の年、仁心夙に表れ、慧性俄かに堅し。方に塵累を釈き、遂に良縁に託し、心は清く鏡徹し、戒は潔く珠円なり。精誠苦行し、雪のごとく凛とし氷のごとく鮮やかにして、三乗は洞暁し、九部咸な甄かなり。時に講肆に臨み、亟かに香筵に陟り、鵷鸞雑遝し、龍象駢闐す。一たび辯囿を揚げ、幾たびか言泉に沐し、法門の棟宇、覚海の舟船たり。四蛇詎ぞ息まん、二鼠俄かに遷る、仁を輔けんとするも験莫く、善を与にせんとするも徒然たり。式て高塔を建て、爰に古阡に臨み、南は豹巘を瞻、北は龍川を瞰る。桑榆日に落ち、松檟煙を生じ、山風四もに起り、隴月孤り懸かる。一たび芬烈を銘し、三たび桑田を変う。左衛翊壹府翊衛・彭城の劉欽旦、書す。景龍四年歳次己丑五月十日、比丘尼仙悟迦毗等建つ。

（松浦典弘）

四　崇義寺思言禪師塔銘

〔釋文〕

大唐崇義寺思言禪師塔銘幷序／

夫法尚應權。言貴稱物。無違於俗。有利於人。所以不捨／凡流。而登覺路。未階十地。便入一乗者。其惟禪師乎。禪／師。法諱思言。俗姓衡氏。京兆櫟陽人也。幼標定慧。早悟／眞空。戒珠明朗。心田獨王。四分十誦。自得地靈。三門九／法。惣攝天口。無解而解。善惡俱亡。非空自空。物我齊泯。／不現身意。行住涅槃。雖假言談。長存波若。由是隨縁起／

念。自關洛而徂遊。應物虛□。經海沂而演授。昭化煩惑。／濟盪塵冥。法侶雲趨。俗徒霧委。請益無倦。屢照忘疲。薰／以香焚。膏緣明盡。因茲不悉。遂遘淸贏。日居月諸。奄光／朝露。以延和元年五月二十二日。捨化於浚郊大梁之／域。遂就闍維。嗚呼哀哉。春秋六十有九。四十夏。祥河輟／潤。惠炬潛光。井邑生悲。風雲改色。卽以開元二年歲次／甲寅閏二月己未朔十二日庚午。姪沙門悊及道俗等。／敬收舍利於終南楩梓谷大善知識林後本師域所。起／塔供養。俯臨寶刹。仍從梵衆之遊。却背皇居。尙起杜多／之行。緇素如失。道俗生哀。嗚呼。蓮華會上。空聞說法之／名。荆蕀林中。獨結哀歌之恨。梁摧道逝。涕實何依。氣竭／恩深。敢爲銘曰。／

本有之有。三千大千。人超佛地。法證眞天。智飛一覺。神／亡二邊。弗住而住。雖牽不牽。參羅萬像。愚智皆賢。悲深／性域。化浴情田。形隨物弊。身將劫遷。哀纏沒後。痛結生／前。變通誰察。起現何年。／

〔訓読〕

大唐崇義寺思言禅師塔銘并びに序

夫れ法は権に応ずるを尚び、言は物に称うを貴ぶ、俗に違う無く、人に利する有り。凡流を捨てずして覚路に登り、未だ十地に階まずして、便ち一乗に入る所以の者は、其れ惟だ禅師のみなるか。

禅師、法諱は思言、俗姓は衡氏、京兆櫟陽の人なり。幼くして定慧を標わし、早に真空を悟り、戒珠は明朗にして、心田は独り王んなり。四分十誦は、自のずから地霊を得、三門九法は、惣て天口を摂む。解無くして解せば、善悪倶に亡く、空に非ずして自のずから空なれば、物我斉しく泯ぶ。身意を現ぜず、行きて涅槃に住み、言談に仮ると雖も、長く波若に存す。是れに由りて縁に随い念を起し、関洛自りして徂遊し、物に応じて□を虛にし、海沂を経て演授す。煩惑を昭らかに化し、塵冥を済い盪う。法侶雲趨し、俗徒霧委し、益を請いて倦むなく、屢々照らして疲れを忘る。薰は香を以て焚かれ、膏は明に縁りて尽く。茲に因りて不悉、遂に清贏に遘い、日居月諸、光を奄い朝露のごとし。延和元

年五月二十二日を以て、浚郊大梁の域に捨化し、遂に闍維に就く。嗚呼、哀しい哉。春秋六十有九、四十夏なり。祥河は潤おすを輟め、恵炬は光を潜め、井邑は悲しみを生じ、風雲色を改む。即ち開元二年歳次甲寅閏二月己未朔十二日庚午を以て、姪沙門悉及び道俗等、敬んで舎利を終南梗梓谷大善知識林の後の本師の域所に収め、塔を起て供養す。俯て宝刹に臨めば、仍お梵衆の遊に従い、却いて皇居を背にすれば、尚お杜多の行を起つ。緇素失うが如く、道俗哀を生ず。嗚呼、蓮華会上、空しく説法の名を聞き、荆蕀林中、独り哀歌の恨を結ぶ。梁は摧かれ道逝くに、涕は実に何にか依らん。気は竭きて恩深し。敢えて銘を為りて曰く、

本有の有、三千大千、人は仏地に超え、法は真天を証す。智は一覚に飛び、神は二辺を亡ぼす。住まずして住み、□（牽）と雖も牽かず、参羅万像、愚智皆賢なり。悲しみは性域に深く、化は情田に浴す。形は物に随いて弊れ、身は劫を将って遷る。哀は没後に纏い、痛は生前に結ぶ。変通誰か察せん。起現何れの年ぞ。

（浦山あゆみ）

五　六度寺侯莫陳大師寿塔銘文

〔釋文〕

六度寺侯莫陳大師壽塔銘文幷序／　朝議大夫守宋王諮議上柱國崔寛撰／

昔者如來滅後。正法常存。二十四賢。遞相付囑。俱持／寶印。各護明珠。自師子云亡。遺音彌瘁。或龍荒之際／像教不行。或差別之時薫修乃異。有達摩禪師者。懸／解正一之理。深入不二之門。克復一乘。紹隆三寶。自／茲厥後。凡經八代。傳法燈而不昧。等慧日而長明。若／乃蘊龍象之姿。積梯航之用。誨人不倦。惠我無疆。同／槖籥而罔窮。等洪鍾而

必應。圓融三敎。混合一家。沃／未悟之心。杜遊談之口者。則我大師有之矣。
大師姓／侯莫陳。諱琰之。法名智達。京兆長安人也。族大龍坰。／賞延龜紐。地邮公侯之胤。人承孝友之家。宿植因果。／生知夢幻。大莖大葉。自毓彩於冥前。玄之又玄。坐發／揮於度內。年甫弱冠。便入嵩山。初事安闍梨。晩歸秀／和上。並理符心會。意授口訣。二十餘年。遂獲道果。和／上曰。汝已智達。辯才無碍。宜以智達爲名。道在白衣。／吾無憂矣。卽承授記之音。復傳祕密之藏。欲導引迷／俗。故往來人閒。時遊洛中。或詣河北。迎門擁篲。不可／勝紀。因而得度者。有歲其人焉。
此寺有比丘尼。无上／比丘尼導師者。俗姓裴氏。河東聞喜人也。代捐淸通。／已推於茂族。時稱領袖。復見於靈苗。姊妹二人。分形／共業。乘銀臺而直往。守金道而無迴。白黑遵崇。遐邇／敬仰。大師曰。雖稱極樂。終非究竟。於是眷彼二尼。不／遠千里。正師資之禮。具函杖之儀。被如來衣。坐如來／室。直示總持之要。宏開頓悟之宗。師等惕然有同冰／釋。更西面而請益。知東方之靡窮。欲濟逢舟。頻鑽見／火。一二年內。俱獲菩薩。乃相與言曰。上恩已洽。至德／難忘。古先悲人。仍爲壽藏。惠愛於物。必建生祠。凡厥／吾徒。可不勠力。遂於此地。爲大師立三彼浮圖焉。
若／乃人物形勝。林麓藪澤。傍連牧野。前徒百勝之場。却／負商郊。近古千年之業。周武王之問罪。殷有忠臣。吳／季札之觀風。衞多君子。代閱今古。事摽靈異。夫其壯／也。仰太行之合沓。夫其麗也。俯淇澳之淸冷。珍木迎／地以攢羅。奇峯半天而競糺。雜花交映。楊慧(ママ)日於金／輪。衆鳥和鳴。韻祥風於寶鐸。實嚴淨之勝境。信靈祗／之所託者乎。旣疏廻向之因。復闡歸依之地。走雖不／敏。輒亦庶幾恍忽之閒。若已再昇者矣。大師隨方演／暢。應物出處。其往矣。恬焉惔焉。其來也。惟寂惟漠。徒／觀其精意練魄凝神滌慮。無法通妙法之源。非身入／大身之境。所以稱不可得。是故□難思議。啓方便之／門。咸蒙善誘。示眞實之相。俱令解脫。因塔廟之在斯。／粗可得而陳也。爾時弟子欲重宣此義。敬作銘云。／行波羅蜜。惟精惟一。俱詣道場。咸希祕密。法衷思妙。／相中求實。未得其門。何階入室。其一。涅槃之際。付囑高／僧。旣云迦葉。復現摩騰。得所不見。聞所未曾。爰有證／者。至今傳燈。其二。衆生輪轉。未始有極。遇茲大師。捨彼／

大力。曉示如藏。諦觀師臆。凡厥勝因。偶善知識。其三。裴／氏比丘。宿植薫修。銀臺宴坐。金地嬉遊。歎泛鯷壑。先／逢鷁舟。遂登彼岸。云何不酬。其四。蒼山之南。濁河之北。／經始塔廟。闡揚功德。信類給孤。施如檀特。永習師保。／長懐揩則。其五。　開元二年六月十日入涅槃／　弟子崔寵。弟子裴炯。弟子崔玄悊。子僧重瑩。／　造塔匠左思仁　書手王玄貞　弟子田普光／

〔訓読〕

六度寺侯莫陳大師寿塔銘文并びに序　　朝議大夫守宋王諮議上柱国崔寛撰す

昔、如来の滅後、正法は常に存し、二十四賢、遞いに相い付嘱して、倶に宝印を持し、各々明珠を護る。師子ここに亡びて自り、遺音弥いよ瘁る。或いは龍荒の際、像教行われず、或いは差別の時、薫修乃ち異れり。達摩禅師なる者有り。懸かに正一の理を解し、深く不二の門に入り、克く一乗を復し、紹いで三宝を隆んにす。茲れ自り厥の後、凡そ八代を経て、法灯を伝えて昧からず、慧日に等しくして長く明かなり。乃ち龍象の姿を蘊み、梯航の用を積み、人に誨えて倦まず、我に恵みて疆無く、槖籥に同じくして窮まる罔く、洪鍾に等しくして必ず応じ、三教を円融し、一家混合し、未悟の心を沃し、遊談の口を杜ぐが若き者は、則ち我が大師之れ有り。

大師、姓は侯莫陳、諱は琰之、法名は智達、京兆長安の人なり。族は龍坰に大（さか）んにして、賞は亀紐を延べ、地は公侯の胤に邮（めぐ）まれ、人は孝友の家を承く。宿に因果を植え、生れながら夢幻を知り、大莖大葉、自ずから彩を冥前に毓（はぐく）み、玄の又た玄、坐ながらにして度内に発揮す。年甫めて弱冠にして、便ち嵩山に入り、初め安闍梨に事え、晩に秀和上に帰す。並びて理に符し心に会し、意もて授け口もて訣すること、二十余年にして、遂に道果を獲たり。和上曰く、汝已に智達し、弁才碍ぐる無し。宜しく智達を以て名と為すべし。道は白衣に在り、吾れ憂う無きなり、と。既に授記の音を承け、復た秘密の蔵を伝う。迷俗を導引せんと欲するが故に人間に往来し、時に洛中に遊び、或いは河北に詣る。迎

門擁篲すること勝げて紀すべからず。因りて度を得る者、歳ごとに其の人有るなり。

此の寺に比丘尼有り、无上比丘尼導師なる者、俗姓は裴氏、河東聞喜の人なり。代々捐てて清通なれば、已に茂族に推され、時に領袖と称せらるること、復た霊苗に見わる。姉妹二人、形を分かつも業を共にし、銀台に乗りて直ちに往き、金道を守りて迴る無し。白黒遵崇し、遐邇敬仰す。大師曰く、極楽と称すと雖も、終に究竟に非ず、と。是に於いて彼の二尼を眷（いつくし）み、千里を遠しとせず、師資の礼を正しくし、函杖の儀を具え、如来衣を被せ、如来室に坐せしめ、直ちに総持の要を示し、宏く頓悟の宗を開かしむ。師等惕然として氷釈するに同じきもの有り。更に西面して請益し、東方の窮まる靡きを知る。逢舟に済わんと欲し、頻りに鑽して火を見る。一二年の内、倶に菩薩を獲、乃ち相い与に言いて曰く、上恩已に洽し、至徳忘れ難し。古先の悊人、なお寿蔵を為し、物を恵愛するには、必ず生祠を建つ。凡そ厥れ吾が徒、力を勠（あわ）さざるべけんや、と。遂に此の地において大師が為に三級の浮図を立つるなり。

乃ち人物形勝、林麓薮沢の若きは、傍は牧野に連なり、前徒百勝の場なり、却いては商郊を負い、近古千年の業なり。周の武王の罪を問えば、殷に忠臣有り、呉の季札の風を観れば、衛に君子多し。代々今古を閲、事に霊異を摽（しるす）す。夫れ其の壮んなるや、太行の合沓を仰ぎ、夫れ其の麗しきや、淇澳の清冷に俯（み）る。珍木地に迎えて以て攢羅なり、奇峯天に半ばにして競糺たり。雑花交ごも映え、慧日を金輪に揚げ、衆鳥和鳴して、祥風を宝鐸に韻（ひび）かすは、実に厳浄の勝境にして、信に霊祇の託する所の者なるか。既に廻向の因を疏し、復た帰依の地を闢く。走、敏ならずと雖も、輒ち亦た恍忽の間に庶幾きこと、已に再び昇るが若き者なり。大師、方に随いて演暢し、物に応じて出処す。其の往くや、恬なり惔なり、其の来たるや、惟れ寂惟れ漠、徒だ其の精意、練魄、凝神、滌慮を観るのみ。無法は妙法の源に通じ、非身は大身の境に入る、所以に不可得と称し、是の故に難思議と□す。方便の門を啓きては、咸な善誘を蒙り、真実の相を示しては、倶に解脱せしむ。塔廟の斯に在るに因て、粗々得て陳ぶべきなり。爾の時弟子重ねて此の義を宣べんことを欲し、敬んで銘を作りて云く、

波羅蜜を行じて、惟れ精惟れ一、俱に道場に詣りて、咸な秘密を希い、法は思妙に衷い、相は求実に中る、未だ其の門を得ず、何ぞ入室に階(すす)まん。其の一

涅槃の際、高僧に付嘱す、既に迦葉に云い、復た摩騰に現われ、見ざる所を得、未だ曾てせざる所を聞く、爰に証す者有り、今に至りて灯を伝えるなり。其の二

衆生は輪転して、未だ始めより極まり有らず、茲の大師に遇い、彼の大力を捨て、暁かに如蔵を示し、諦かに師臆を観じ、凡そ厥の勝因は、善知識に偶(まな)ぶ。其の三

裴氏比丘、薫修を宿植し、銀台に宴坐し、金地に嬉遊す、歓びて鯷壑に泛び、先に鷄舟に逢い、遂に彼岸に登る、酬いざるを云何せん。其の四

蒼山の南、濁河の北、塔廟を経始し、功徳を闡揚す、信に給孤に類し、施すこと檀特の如し、永く師保に習い、長く揩則を懐く。其の五

開元二年六月十日、涅槃に入る。

弟子崔寵・弟子裴炯・弟子崔玄悊・弟子僧重瑩

造塔匠左思仁・書手王玄貞・弟子田普光

（浦山あゆみ）

六　浄域寺故大徳法蔵禅師塔銘

〔釋文〕

大唐淨域寺故大德法藏禪師塔銘幷序　京兆府前鄉貢進士田休光撰文／

世之業生滅若輪環者。則雖塵沙作數。草木爲籌。了無遺纖哉。吁。不可知者。其／惟流浪乎。夫木性生火。水中有月。以凡筌聖。從道場而至道場。追因及果。非前／際而於後際。行之於彼。得之於此。

禪師諱法藏。緣氏諸葛。蘇州吳縣人。昔羣雄／角力。三方鼎峙。蜀光有龍。吳恃其虎。瑾之後裕。蟬聯姑蘇。曾祖譽。吳郡太守。蘇／州刺史。祕書監。銀青光祿大夫。上柱國。開國男。大父頴。隨閬州刺史。銀青光祿／大夫。父禮。　皇唐少府監丞。吳會旗裳。東南旖旎。洗墨而淸夷落。衣錦而燭／江鄉。山海禁錢。蓬萊祕府。屢遊淸貫。歷拜寵章。禪師卽蘇州使君之曾孫。少府／監丞之第二子也。年甫二六。其殆庶幾知微知章。克岐克嶷。此寺大德欽禪師／廣世界津航。人非鑽仰。禪師伏膺寂行。禮備師資。因誦經。至永徽中。頗以妙年／經業優長。奉　敕爲濮王度。所謂天孫利益。禪門得人。

禪師自少出家。卽／與衆生作大善知識。道行第一。人天殊勝。開普門之幽鑰。酌慈源之蜜波。由恐／日月居諸。天地消息。每對天龍八部。晝夜六時。如救頭然。曾未暫捨。非乞之食／不以食。以至于頭陀。非掃之衣不以衣。得之於蘭若。禪師自少于老。馳騾象馬。／莫之聞乘也。以爲鎔金爲像非本也。裂素抄經是末也。欲使賤末貴本。背僞歸／眞。求諸如來。取諸佛性。世二相八十種好。衆生對面而不識。奈何修假以望眞。／且夫萬行之宗。衆相之本。生善之地。修善之境。禪師了了見之矣。

夫鐘鼓在庭。／聲出于外。如意元年。　大聖天后。聞禪師解行精最。奉　制請／於東都大福先寺檢校无盡藏。長安年。又奉　制請檢校化度寺无盡藏。／其年。又奉　制請爲薦福寺大德。非禪師戒固居龍象之首。清淨開人倫／之目。不然焉使　天文屢降。和衆相推。揚覺路之威儀。總禪庭之準的。護／珠圓朗。智刃雄鳴。伏違順之鬼魔。碎身心之株杌。廢情屬境。卑以自居。如谷王／之流謙。百川委輸。若周公之吐哺。天下歸心。菩薩下人。名在衆生之上。悲哉。三／界卽火宅之所。四大將歲時之速。遂從道來。亦從道去。遂拂衣掩室。脫舄繩牀。／惟惚惟慌。不驚不怖。粤以開元二年十二月十九日。捨生于寺。報齡七十有八。／門人若喪考妣。乃相謂曰。和上云亡。吾徒安放。乃抆血相視。仰天椎心。卽以其／年十二月廿□日。施身于終南山楩梓谷屍陁林。由是積以香薪。然諸花疊。收／其舍利。建窣睹波于禪師塔右。自佛般入涅槃。于今千五百年矣。聖人不見。正／法陵夷。卽有善華月法師。樂見離車菩薩。愍茲絕紐。並演三階。其敎未行。咸遭／弑戮。有隨信行禪師。與在世。造舟爲梁。大開普敬認惡之宗。將藥破病之說。撰／成數十餘卷。名曰三階集錄。禪師靡不探賾索隱。鈎深致遠。守而勿失。作禮奉／行。是故弟子將恐頹其風聲。乃掇諸景行。記之于石。銘曰。／

有若禪人。凝稜心不易兮。身世澒洞。探討眞蹟兮。寂行冲融。渙若冰釋兮。軒裳／蟬聯。晴暉相射兮。奕裔不染。乾乾衣錫哉。蕭灑諠譁。地自虛僻兮。玄關洞開。亡／珠可索兮。吾將斯人。免夫過隙兮。魂兮何之。聲流道格。若使天地長久而可知。／卽相與摭實。刊之于石兮。　開元四年歲次景辰五月景子朔廿七日壬寅建／

〔訓読〕

大唐浄域寺故大徳法蔵禅師塔銘并びに序　京兆府前郷貢進士田休光文を撰す

世の業の生滅すること輪環のごとき者は、則ち塵沙を数と作し、草木を籌と為すと雖も、了(すべ)て遺纖無し。吁、知るべからざる者は、其れ惟だ流浪のみか。夫れ木性は火を生じ、水中に月有り。凡を以て聖を筌し、道場従り道場に至る。

因を追いて果に及び、前際に非ずして後際に於いてす。之を彼に行い、之を此に得たり。

禅師、諱は法蔵、縁氏は諸葛、蘇州呉県の人。昔、群雄力を角べ、三方鼎峙し、蜀は光いに龍有り、呉は其の虎を恃み、瑾の後裕、姑蘇に蟬聯す。曾祖譽は、呉郡太守・蘇州刺史・秘書監・銀青光禄大夫・上柱国・開国男。大父頴は、隨（隋）の閬州刺史・銀青光禄大夫。父礼は、皇唐の少府監丞。呉会に旗裳し、東南に旖旎し、墨を洗いて夷落を清め、錦を衣て江郷を燭す。山海の禁銭、蓬莱の秘府、屢々清貫に遊し、寵章を歴拝す。

禅師は即ち蘇州使君の曾孫、少府監丞の第二子なり。年甫めて二六、其れ殆んど微を知りて章を知り、克く岐にして克く嶷なるに庶幾し。此の寺の大徳欽禅師広（？）は世界の津航にして、人は鑽仰するに非ざれども、禅師は寂行を伏膺し、礼は師資を備え、因りて誦経す。永徽中に至り、頗る妙年にして経業優長なるを以て、勅を奉じて濮王の為に度せらる。所謂、天孫の利益、禅門に人を得たり。

禅師は少き自り出家して、即ち衆生のために大善知識と作り、道行第一、人天の殊勝たり。普門の幽鑰を開き、慈源の蜜波を酌む。由お日月の居諸し、天地の消息するを恐れ、毎に天龍八部に対いて、昼夜六時、頭然を救うが如く、曾て未だ暫くも捨めず。乞の食に非ざれば以て食せず、以て頭陀に至り、掃の衣に非ざれば以て衣ず、之を蘭若に得たり。

禅師は少き自り老に于てするまで、駟騾象馬、之れに乗るを聞く莫し。以為えらく、金を鎔して像を為るは本に非ず。素を裂きて経を抄するは是れ末なりと。末を賤しめて本を貴び、偽に背きて真に帰し、諸れを如来に求め、諸れを仏性に取らしめんと欲すれども、三十二相八十種好、衆生は対面して識らず。奈何ぞ仮を修めて以て真を望まん。且つ夫れ万行の宗、衆相の本、生善の地、修善の境は、禅師了了として之を見る。

夫れ鐘鼓の庭に在りて、聲、外に出ず。如意元年、大聖天后、禅師の解行精最なるを聞き、制を奉じ、請われて東都大福先寺に於て無尽蔵を検校す。長安の年、又た制を奉じ、請われて化度寺の無尽蔵を検校す。其の年、又た制を奉じ、請われて薦福寺の大徳と為る。禅師の戒固なること龍象の首に居り、清浄なること人倫の目を開くに非ざるよりは、然

らざれば焉くんぞ天文をして屢々降らしめ、和衆をして相推さしめ、覚路の威儀を揚げ、禅庭の準的を総べしめんや。護珠は円朗にして、智刃は雄鳴し、違順の鬼魔を伏し、身心の株杌を砕く。情を廃し境に属き、卑くして以て自ら居ること、谷王の流謙して、百川の委輸するが如く、周公の吐哺して、天下の心を帰するが若し。菩薩、人に下りて、名は衆生の上に在り。悲しいかな。三界は即ち火宅の所、四大は将て歳時の速なる、既に道従りして来り、亦た道従りして去る。遂に衣を掩室に払い、舄を縄牀に脱ぎ、惟れ惚、惟れ慌、驚かず怖れず。

粤に開元二年十二月十九日、寺に捨生す。報齢七十有八。門人考妣を喪うが若く、乃ち相謂いて曰く、和上云に亡び、吾が徒安くにか放たると。乃ち血を抆いて相い視、天を仰いで心を椎つ。即ち其の年十二月廿□日を以て、終南山榎梓谷屍陁林に施身す。是れに由りて積むに香薪を以てし、諸れを花畳に然し、其の舎利を収め、窣睹波を禅師の塔右に建つ。仏、涅槃に般入して自り、今に于て千五百年なり。聖人見われず、正法陵夷す。即ち善華月法師、楽見離車菩薩有り、茲の絶紐を愍れみ、並びに三階を演ぶれども、其の教未だ行われず、咸な弑戮に遭う。有隋（隋）の信行禅師、与に世に在り、舟を造りて梁と為し、大いに普敬認悪の宗、将薬破病の説を開き、撰して数十余巻を成し、名づけて三階集録と曰う。禅師は探賾索隠、鈎深致遠せざるなく、守りて失うなく、作礼奉行す。是の故に弟子将に其の風声を頽らしめんことを恐れ、乃ち諸景行を掇い、之を石に記す。銘に曰く、

禅人の若き有り、稜心を凝らして易へず。身世澒洞にして、真蹟を探討す。寂行は冲融、渙として氷の釈くるが若し。軒裳蟬聯して、晴暉相射す。奕裔染まらず、乾乾として衣錫す。諠譁に蕭灑して、地自ら虚僻たり。玄関洞開して、亡珠索むべし。吾斯の人を将て、夫の過隙を免れしめんとす。魂や何くに之ける、声流れ道格る。もし天地をして長久ならしむるも知るべく、即ち相与に実を摭ひ、之を石に刊す。

開元四年歳次景辰五月景子朔二十七日壬寅建つ

（今場正美）

七　大薦福寺故大徳思恒律師誌文并序

〔釋文〕

唐大薦福寺故大徳思恒律師誌文并序　　鄠縣尉常□□□文／

道不虛行。必將有授。受聖教者。非律師而誰。律師諱思恒。俗姓顧氏。吳郡／人也。曾祖明。周左監門大將軍。祖元。隨門下上儀同三司。蔡蕪郡開國公。／使持節洪州諸軍事。行洪州刺史。父藝。　　皇朝恆州錄事參軍。並東／南之美。江海之靈。係丞相之端嚴。散騎之仁厚。以積善之慶。是用誕我律／師焉。

律師稟正眞之氣。含太和之粹。生而有志。出乎其類。越在幼冲。性與／道合。兒戲則聚沙爲塔。冥感而然指誓心。乃受業於持世法師。咸亨中　／敕召大德。入太原寺。而持世與薄塵法師。皆預焉。律師深爲塵公所重。每／歎曰。興聖教者。其在茲乎。遂承　　制而度。年廿而登具戒。經八夏卽／預臨壇。參修素律師新疏講八十餘遍。弟子五千餘人。以爲一切諸經。所／以通覺路也。如來金口之言。靡不該涉。菩薩寶坊之論。皆所研精。天下靈／境。所以示聖跡也。乃陟方山五臺。聞空聲異氣。幽嚴勝寺。無不經行。感而／遂通。所以昭靈應也。嘗致舍利一粒。後自增多。移在新缾。潛歸舊所。有爲／之福。所以濟羣品也。造菩提像一鋪。施者不能愛其寶。建塗山寺一所。仁／者於是子而來。洗僧乞食。以生爲限。寫經設齋。惟財所極。忘形杜口。所以／歸定門也。詣秀禪師。受微妙理。一悟眞諦。果符宿心。寂爾無生。而法身常／在。湛然不動。而至化滂流。於是能事畢矣。福德具矣。以見身爲過去。則棄／愛易明。以遺形爲息言。則證理斯切。乃脫落人世。示歸其眞。開元十四年／十一月廿六日。終於京大薦福寺。年七十有六。

初　　／和帝代。召入內道場。命爲菩薩戒師。充十大德。統知天下佛法僧事。圖像／於林光殿。　　御

製畫讚云云。律師固辭　恩命。屢請歸閑。歳餘／方見許焉。其靜退皆此類也。屬纊之夜。靈香滿室。空樂臨門。悠爾而逝。若／有迎者。蓋應世斯來。自天宮而暫降。終事則往。非人寰之可留。弟子智舟／等。彼岸仍遙。津梁中奪。心猿未去。龍象先歸。禪座何依。但追墳塔。法侶悲／送。且傾都鄙。其年十二月十五日。葬神禾原塗山寺東。名（ママ）願託勝因。思陳／盛美。法敎常轉。自等於圓珠。雕斲斯文。有慙於方石。銘曰。／聖立萬法。法無二門。以身觀化。從流討源。有爲捨栰。無生定猿。律師盡妙。／像敎斯存。我有至靜。永用息言。示以形逝。留乎道尊。有緣有福。求我祇園／

〔訓読〕

唐・大薦福寺の故大徳思恒律師の誌文并びに序　鄠県尉常□□□文

道は虚行ならず、必ず将に授くるもの有らんとす。聖教を受くる者、律師に非ずして誰ぞ。律師、諱は思恒、（俗姓）顧氏、呉（郡）の人なり。曾祖の明は、周の左監門大将軍、祖の元は随（隋）の門下上儀同三司・蔡蕪郡開国公・使持節洪州諸軍事・行洪州刺史、父の藝は皇朝恒州録事参軍なり。並びに東南の美、江海の霊にして、丞相の端厳、散騎の仁厚に係る。積善の慶を以て、是を用て我が律師を誕む。

律師は、正真の気を稟け、太和の粋を含む。生まれては志有りて、其の類を出で、越えて幼冲に在りては、性は道と合す。児戯すれば則ち沙を聚めて塔を為り、冥感して指を然（もや）して心に誓う。乃ち業を持世法師より受く。咸亨中、勅して大徳に召し、太原寺に入らしむ。而して持世と薄塵法師と、皆焉に預る。律師は深く塵公の重んずる所となる。毎に歎じて曰く、聖教を興す者は、其れ茲に在るかと。遂に制を承けて度せられ、年二十にして具戒に登る。八夏を経て即ち臨壇に預るなり。素律師の、新疏もて八十餘遍を講ずるに参修す。弟子五千餘人あり。以為えらく、一切の諸経は覚路に通ずる所以なり。如来金口の言は、該渉せざるはなく、菩薩宝坊の論は、皆研精する所なり。天下の霊境は、聖跡

を示す所以なり。乃ち、方山五台に陟り、空声異気を聞く。幽厳勝寺は、経行せざる無し。感じて遂に通ずるは、霊応を昭かにする所以なり。嘗て舎利一粒を致すに、後、自のずから増多し、移して新鉼に在らしむるに、潜かに旧所に帰る。有為の福は、群品を済う所以なり。菩提像一鋪を造りて、施者は其の宝を愛する能わず、塗山寺一所を建て、仁者是に於いて子のごとくして来るなり。洗僧・乞食は生を以て限と為す。写経・設斎は惟れ財の極まる所なり。形を忘れ口を杜ぐは、定門に帰する所以なり。秀禅師に詣でて微妙の理を受く。一たび真諦を悟れば、果は宿心に符う。寂爾無生にして、法身は常在し、湛然不動にして、至化は滂流す。是に於て、能事畢れり、福徳具われり。見身を以て過去と為せば、則ち愛を棄ること易く明かにして、遺形を以て息言と為せば、則ち理を証すること斯れ切なり。乃ち人世を脱落し、其の真に帰するを示す。開元十四年十一月二十六日、京の大薦福寺に終る。年七十有六なり。

初め、和帝の代、召して内道場に入れしめ、命じて菩薩戒師と為す。十大徳に充て、天下の仏法僧事を統知せしむ。像を林光殿に図き、画讃を御製すと云云。律師、恩命を固辞し、屢々閑に帰せんことを請い、歳余にして方めて許さる。其の静退は、皆此の類なり。纊(わた)を属(あて)るの夜、霊香室に満ち、空楽門に臨み、悠爾として逝く。迎うる者有るがごときは、蓋し世に応じて斯れ来るならん。天宮よりして暫く降り、事を終えれば則ち往くは、人寰の留むべきに非ず。弟子智舟等、彼岸仍お遙かにして、津梁中奪し、心猿未だ去らざるに、龍象先に帰す。禅座、何にか依らん。但だ墳塔を追うのみ。法侶悲送し、且つ都鄙を傾く。其の年の十二月十五日、神禾原の塗山寺の東に葬むる。各々勝因を託さんことを願い、盛美を陳べんことを思う。法教常に転じて、自のずから円珠に等しく、斯の文を雕斲して、方石に慙ずる有り。銘に曰く、

聖、万法を立て、法に二門無し。身を以て化を観、流に従いて源を討ぬ。有為もて栰を捨て、無生もて猿を定む。律師、妙を尽し、像教、斯に存す。我に至静有りて、永く息言を用う。示すに形の逝くを以てし、道尊を留む。縁有り、福有りて、我を祇園に求めん。

八　□義寺敬節法師塔銘

（織田顕祐）

〔釋文〕

大唐□義寺故大德敬節法師塔銘幷序／

夫王而作則者大雄。見而遄者大寶。聲被周漢。義逸齊／梁。學比犛毛。富如崐玉。道飾其行。俗賞其音。或內祕靈／知。或外見常迹。起伏不拘於代。出沒所謂於須臾。孰有／以兼之。公得其門也。／

惟大德。俗姓盧。諱敬節。范陽人也。祖　。尙書遠葉。栖志／丘園。父樂。司徒季英。閑居遁世。愍于穉子。逖以羣流。放／令出家。不從文秩。上可以益　　后。下可以利人。不／累莊嚴。足陪淨藏。令投虔和上受業。年甫十歲。日誦千／言。維摩妙高。飛峰口海。法華素月。吐照情田。奏梵音以／雲揚。感神明而電激。厭俗之垢。　王澤遐沾。落髮／之貞。天魔爲慴。至二十九。入道具臘。寺擧都維那二十／載。淸拔僧務。造長廊四十間。不日克就。光嚴　／帝宇。粹表祇園。結棟凌霞。飛簷振景。士拜左顧。靡怯風／搖。人謁右旋。非憂雨散。亦嘗柔外以定。定力振振。順中／以如。如心弈弈。吁法橋而虹斷。切義舫之神移。莫不悼／哉。何嗟及矣。以開元十七年七月十五日。終于私房。春／秋七十有五。窆於神和原。律也。門人處王璿延祚等。念／松迴茂。仰蕙遙芬。恨頹景之不留。恨驚風之早落。師魂／遠何至。資影痛何孤。恐岸成川。起塔崇禮。式爲銘曰。／

迹滿三界。神放六通。敎令遞囑。德位常融。轉延像世。運／及都公。木選寒栢。山寶舒虹。行高奬下。言貴居忠。俗承／遠聲色。道洽化無窮。水搖魚徙□。人斷院悲空。日影何／旋北。山陰遽已東。荒郊悲慘慘。烟氣亂葱葱。式修營兮／妙

塔。用表列於仁雄。柩窆歸於泉壤。性遙拔於樊籠。挫／一代之濁命。流千古之清風。／

〔訓読〕

大唐□義寺故大徳敬節法師塔銘并びに序

夫れ王にして則と作るは大雄、見われてや遄かなるは大宝。声は周漢を被い、義は斉梁に逸れ、学は牸毛に比し、富は崑玉の如く、道は其の行を飾り、俗は其の音を賞し、或いは内に霊知を秘め、或いは外に常迹を見わし、起伏は代に拘らず、出没は所謂須臾に於いてす。孰か以てこれを兼ぬるあらん。公、其の門を得るなり。

惟れ大徳、俗姓は盧、諱は敬節、范陽の人なり。祖は□、尚書の遠葉にして、志を丘園に栖まわす。父は楽、司徒の季英にして、閑居遁世す。穉子を愍れみ、逖ざくるに群流を以てし、放して出家し、文秩に従わざらしむ。上は以て后を益す可く、下は以て人を利す可く、荘厳には累らざるも、浄蔵に陪するに足る。虔和上に投じて業を受けしむ。年甫めて十歳にして、日に千言を誦う。維摩妙高、峰を飛びて海を口にし、法華素月、情田を吐照す。梵音を奏して以て雲揚がり、神明を感じて電激し。俗の垢を厭い、王沢遐かに沾おい、落髪の貞、天魔慴れを為す。二十九に至りて、道に入りて臘を具う。寺、都維那に挙ぐること二十載、僧務に清抜し、長廊を造ること四十間、日ならずして克く就る。光は帝宇に厳たりて、粹は祇園に表わる。結棟は霞を凌ぎ、飛簷は景を振う。士、拝すれば左顧し、風の揺するに怯ゆる靡く、人、謁すれば右旋し、雨の散るを憂うるに非ず。亦た嘗に外を柔んじるに定を以てし、定力振振たり、中に順うに如を以てし、如心弈弈たり。法橋の虹断を吁き、義舫の神移を切しむ。悼まざるは莫く、何ぞああ及ばん。開元十七年七月十五日を以て私房に終る。春秋七十有五。神和原に窆る。律なり。門人処王璿延祚等、松の迴りて茂るを念じ、蕙の遥かに芬るを仰ぎ、頽景の留まざるを恨しみ、驚風の早く落つるを恨む。師魂は遠く何くにか至り、資影は痛みて何くにか孤ならん。岸の川に成るを恐れ、塔を起てて崇礼し、式に銘を為りて曰く、

迹は三界に満ち、神は六通を放つ。教令は遞々嘱し、徳位は常に融る。転じて像世に延び、運りて都公に及ぶ。木は寒栢を選び、山は舒虹を宝とす。行は高くして下を奨め、言は貴くして忠に居る。俗は承けて声色を遠ざけ、道は洽くして無窮に化し、水揺らぎて魚□を徙し、人断ちて院空に悲し。日影何ぞ北に旋り、山陰遽かに已に東す。荒郊悲しく惨惨たり、烟気乱れて葱葱たり。式に妙塔を修営し、用て仁雄に列するを表わす。柩は泉壌に窆帰するも、性は遙かに樊篭より抜け、一代の濁命を挫き、千古の清風を流す。

（浅見直一郎）

九　興聖寺尼法澄塔銘

〔釋文〕

大唐故興聖寺主尼法澄塔銘幷序　　宗正卿上柱國嗣彭王志暕撰幷書／

法師諱法澄。字无所得。俗姓孫氏。樂安人也。吳帝權之後。祖榮。涪州刺史。父同。同州／馮翊縣令。法師弟[ママ]二女。降精粹之氣。含弘量之誠。大惠宿持。靈心早啓。鑒浮生不住。／知常樂可依。託事蔣王。求爲離俗。遂於上元二年出家。威儀戒行。覺觀禪思。跡履眞／如。空用恆捨。遂持瓶鉢一十八事。頭陀山林。有豹隨行。逢神擁護。於至相寺康藏師／處聽法。探微洞悟。同彼善才。調伏堅持。寧殊海意。康藏師每指法師。謂師徒曰。住持／佛法者。卽此師也。如意之歳。淫刑肆逞。誣及法師。將扶汝南。謀其義擧。坐入宮掖。故／法師於是大開聖教。宣揚正法。歸投者如羽翮趨林藪。若鱗介赴江海。昔菩薩化爲／女身。於王後宮說法。今古雖殊。利人一也。　　中宗和帝。知名放出。中使供承。朝／夕不絶。景龍二年。大德三藏等。奏請法師爲紹唐寺主。　　敕依所請。　　／今上在春宮。幸興聖寺。施錢一千貫。充脩

理寺。以法師德望嵩高。　敕補爲興聖／寺主。法師脩緝畢功。不逾旬月。又於寺內。畫花嚴海藏變。造八角浮圖。馬頭空起舍／利塔。皆法師指受規摸及造。自餘功德。不可稱數。融心濟物。遍法界以馳神。廣運冥／功。滿虛空而遇化。不能祇理事塗。請解寺主。遂抄花嚴疏義三卷。及翻盂蘭盆經溫／室經等。專精博思。日起異聞。疲厭不生。誦經行道。視同居士。風疾現身。乃臥經二旬。／飲食絕口。起謂弟子曰。我欲捨壽。不知死亦大難。爲當因緣未盡。後月餘。儼然坐繩／牀。七日不動。唯聞齋時鍾聲。卽喫水。忽謂弟子曰。扶我臥。我不能坐死。臥訖遷神。春／秋九十。開元十七年十一月三日也。以其月廿三日。安神於龍首山馬頭空塔所。門／人師徒弟子等。未登證果。豈知鶴林非永滅之場。鷲嶺是安禪之所。號慕之情。有如／雙樹。法師仁孝幼懷。容儀美麗。講經論義。應對如流。王公等所施。悉爲功德。弟子嗣／彭王女尼弥多羅等。恐人事隨化。陵谷遷移。紀德鐫功。乃爲不朽。銘曰。／

易高惟一。道尊自然。大法雄振。豈曰同年。優曇花色。曇弥善賢。錯落倫次。師在其閒。／濟彼愛河。拯斯苦海。導引羣類。將離纒蓋。不虛不溢。常住三昧。是相無定。隨現去來。／雙林言滅。金棺復開。有緣既盡。歸向蓮臺。衆生戀慕。今古同哀。／

〔訓読〕

大唐故興聖寺主尼法澄塔銘并びに序　宗正卿・上柱國・嗣彭王志暕撰并びに書

法師諱は法澄。字は无所得。俗姓は孫氏。楽安の人なり。呉帝権の後なり。祖の栄は涪州刺史。父の同は同州馮翊県の令なり。法師は弟（第）二女なり。精粋の気を降し、弘量の誠を含む。大恵宿に持し、霊心早に啓く。浮生の住らざるに鑑み、常楽の依るべきを知り、事を蔣王に託し、俗を離れんことを為さんと求む。遂に上元二年に出家す。威儀・戒行、覚観・禅思、跡は真如を履み、空は恒捨を用う。遂に瓶鉢・一十八事を持し、山林に頭陀す。豹の隨行する有りて、神の擁護するに逢う。至相寺の康蔵師の処に法を聴く。探微し洞悟なること、彼の善才に同じ。調伏し堅持するこ

と、寧ぞ海意に殊ならん。康蔵師、毎に法師を指して、師徒に謂いて曰く。仏法を住持する者は、即ち此の師なり、と。如意の年、淫刑肆しいままに逞(さか)んにし、誣、法師に及ぶ。将に汝南を扶けて、其の義挙を謀らんとし、坐して宮掖に入る。故に法師是に於いて大いに聖教を開き、正法を宣揚す。帰投する者、羽翮の林薮に趨るが如く、鱗介の江海に赴くが若し。昔菩薩化して女身と為り、王の後宮に於いて説法す。今古殊にすと雖も、人を利するは一なり。中宗和帝、名を知り放出す。中使をして供承せしむること、朝夕絶えず。景龍二年、大徳三蔵等、奏して法師を紹唐寺主と為さんことを請い、勅ありて請う所に依る。今上春宮に在りて、興聖寺に幸し、銭一千貫を施し、寺を修理するに充てしむ。法師の徳望崇高なるを以て、勅補して興聖寺主と為す。法師脩緝して功を畢えるまで、旬月を逾えず。又寺内に花厳海蔵変を画き、八角の浮図を造り、馬頭空に舎利塔を起こす。皆法師、規模を指授して造に及ぶ。自余の功徳は、称げて数うべからず。心を融して物を済い、法界に遍くして以て神を馳す。広く冥功を運らし、虚空に満ちて化に遇う。ただ事塗を理むる能わず、寺主を解かれんことを請う。遂に花厳疏義三巻を抄し、及び盂蘭盆経・温室経等を翻ず。専精博思し、日ごとに異聞を起こし、疲厭生ぜず、誦経して行道す。視ること居士に同じく、風疾身に現ず。乃ち臥して二旬を経、飲食口に絶ゆ。起ちて弟子に謂いて曰く、我、寿を捨てんと欲す。知らず、死も亦大難、当に因縁未だ尽きるべからずと為すとはと。後、月余、儼然として縄牀に坐し、七日動かず。惟だ斎時の鍾声を聞きて、即ち水を喫するのみ。忽ち弟子に謂いて曰く、我を扶けて臥せしめよ。我、坐して死す能わず、と。臥し訖りて遷神す。春秋九十。開元十七年十一月三日なり。其の月の二十三日を以て、神を龍首山の馬頭空の塔所に安(お)く。門人師徒弟子等、未だ証果に登らず。豈に鶴林は永滅の場に非ずして、鷲嶺は是れ安禅の所なるを知らんや。号慕の情、双樹の如き有り。法師、仁孝は幼より懐き、容儀美麗なり。経を講じ義を論じて、応対流るるが如し。王公等の施す所は、悉く功徳と為す。弟子の嗣彭王の女の尼弥多羅等、人事の化に随い、陵谷の遷移するを恐れ、徳を紀し功を鐫み、乃ち不朽と為さんとす。銘に曰く、

易は惟一を高(たつと)び、道は自然を尊ぶ。大法雄振し、豈に同年と曰わん。優曇花色、曇弥（弥曇？）善賢、錯落倫次し、

師其の間に在り。彼の愛河を済い、斯の苦海を拯う。群類を導引し、将に纏蓋を離れしめんとす。不虚不溢、常に三昧に住す。是れ相は定まる無く、現・去・來に隨う。双林言に滅し、金棺復た開く。有縁既に尽き、蓮台に帰向す。衆生は恋慕し、今古哀を同じうす。

（佐藤義寛）

十　大安国寺故大徳恵隠禅師塔銘

〔釋文〕

大唐大安國寺故大德惠隱禪師塔銘／

禪師俗姓榮。京兆人。其家第四女也。族望北平。／曾祖權。隨金紫光祿大夫。散騎常侍。兵部尚書。／東阿郡開國公。祖建緒。銀青光祿大夫。使持節／息始洪諸軍事。三州刺史。東阿郡開國公。叔祖／思九。黄門侍郎。父懷節。夷州綏陽縣令。外祖韋／氏。字孝基。皇中書舍人。逍遙公之孫也。　／

禪師。聰識內敏。幼挺奇操。粤自齠齔。敬慕道門。／專志誦經。七百餘紙。業行精著。簡練出家。自削／髮染衣。安心佛道。尋求法要。歴奉諸師。如說修／行。曾無懈倦。捐軀委命。不以爲難。戒行無虧。氷／霜比潔。或斷穀服氣。宴坐禪思。或鍊臂試心。以／堅其志。動靜語默。恆在定中。凡所施爲。不輟持／誦。雖拘有漏。密契無爲。雅韻孤標。高風獨遠。

嗚／呼。驚波不息。隙影難留。生滅無恆。遽隨遷謝。／開元二十二年七月十一日。壽終於安國道場。／春秋七十有六。右脇而臥。奄然滅度。臨涅盤時。／遺曰。吾緣。　師僧父母。並在龍門。可安吾於彼／處。與　尊者同一山也。弟子尼圓德。

博通三藏。／才行清高。生事竭仁孝之心。禮葬盡精誠之志。／追痛永遠。建塔茲山。縱陵谷有遷。庶遺芳不朽。／乃爲銘曰。／至道希夷。代罕能窺。探祕究妙。夫惟我師。其一／爰自齠年。訖于晩歳。精念護攝。虔誠不替。肅肅／戒行。明明定惠。淨業滋薫。與佛同契。其二／逝川不駐。隙駟難留。奄隨運往。万古千秋。嗟永／感而無極。式彫紀於芳猷。其三／開元廿六年歳次戊寅二月六日建／

〔訓読〕

大唐大安国寺故大徳恵隠禅師塔銘

禅師、俗姓は栄、京兆の人にして、其の家の第四女なり。北平に族望たり。曾祖の権は隨（隋）の金紫光禄大夫・散騎常侍・兵部尚書・東阿郡開国公なり。祖の建緒は銀青光禄大夫・使持節息・始・洪・諸軍事三州刺史・東阿郡開国公。叔祖の思九は黄門侍郎。父の懐節は夷州綏陽県令。外祖は韋氏、字は孝基、皇中書舎人・逍遙公の孫なり。

禅師は聡識内敏にして、幼きより奇操に挺んず。粤に齠齔より、道門を敬慕し、専志誦経すること、七百余紙。業行精著、簡練して出家し、髪を削り衣を染め、心を仏道に安んじてより、法要を尋求し、諸師を歴奉して、如説に修行し、曾て懈倦するなし。軀を捐て命を委てるも、以て難しと為さず。戒行に虧くるなきこと、氷霜と潔きを比ぶ。或いは断穀、服気、宴坐、禅思し、或いは錬臂試心し、以て其の志を堅うす。動・静、語・黙、恒に定中にあり。凡そ施為せらるるも、持誦を輟めず。有漏に拘わると雖も、密かに無為に契す。雅韻孤り標われ、高風独り遠し。

嗚呼、驚波は息まず、隙影は留め難く、生滅恒なく、遽かに遷謝に隨う。開元二十二年七月十一日、寿、安国道場に終わる。春秋七十有六。右脇して臥し、奄然として滅度す。涅盤（槃）に臨む時、遺して曰く、吾が縁、師僧父母は、並びに龍門に在り。吾を彼の処に安んずべし。尊者と同一の山なり、と。弟子の尼円徳は博く三蔵に通じ、才行清高、生事は仁孝の心を竭し、礼葬は精誠の志を尽くす。永遠を追痛し、塔を茲の山に建つ。縱い陵谷遷ることあるも、庶わ

くは遺芳朽ちざらんことを。乃ち銘を為りて曰く、

至道は希夷にして、代々、よく窺うこと罕し。秘を探り妙を究むるは、夫れ惟だ我が師のみ。其の一

爰に齠年より、晩歳に訖ぶまで、精念護摂し、虔誠替らず。粛粛たる戒行、明明たる定恵、浄業の滋薫は、仏と同契す。其の二

逝川は駐まらず、隙駟は留め難く、奄ち運往に隨い、万古千秋なり。嗟、永感ありて極まる無し。式て彫んで芳猷を紀す。其の三

開元廿六年歳次戊寅二月六日建つ。

（山野俊郎）

十一　薛氏故夫人実信優婆夷未曾有功徳塔銘

〔釋文〕

有唐薛氏故夫人實信優婆夷未曾有功德塔銘幷序／　朝議大夫守河南少尹東郡杜昱撰幷書／

優婆夷。諱未曾有。俗姓盧氏。范陽人。曾祖義恭　皇朝工／部侍郎。祖少儒。衞州刺史。父廣慶。魏州司馬。代業冠冕。詳載碑／牒。優婆夷卽魏州府君有齋季女也。夙稟成訓。猗承柔範。開惠／照於人圖。濬敏發於天性。祗婉娩以自式。鳴環珮而有行。展如／克家。實佐君子。尸李蘭之饋。賦採蘋之什。內睦伯姊。外和六姻。／婦功爛於昌族。芬譽騰於衆口。而聖善慈顧。適來歸寧。沈念在／慰而兩絕。舊痾承驩而自愈。專業禪門。用滋介祉。觀不空而捨／妄。寤無染以得心。雖承敎之日淺。而見實之理深。摧莅若於未／秀。泣瓊瑰而光絕。開元廿六年正月己卯。右脇而臥。告終於城／南

別業。春秋廿有二。是月景申。遷神於關塞之西崗。禮也。

優婆／夷。髫卯多智。潛識邁倫。事不違同。義然後取。九歳聞人誦般若。／便暗習於心。句無遺言。如經師授。或時見僮矇給役。母兄有扶／罰過當。怡色諫止。允叶其中。自宗師大智茂修禪法。生子男舊／矣。孩笑可娛。鍾遘時疾。遂見夭奪。以短長有源。置而不問。其割／棄情愛。卓拔流俗。嘗以諸佛祕密。式是揔持。誦千眼尊勝等呪。／數逾巨億。則聲輪字合。如聞一音。而心閑口敏。更了多字。假使／金盤轉圓。玉壺傾注。儔厥盡美。未云能喩。身抱羸恙。愛語忘勞。／資迫屢空。惠施不倦。夫其守道純深。奉戒精一。居常而靜慮不／亂。臨困而景行彌高。先是未疾之辰。密有遺囑。令卜宅之所。要／近吾師。曠然遠望。以慰平昔。後之人慈悼兼極。不敢加焉。其殊／致豐裁。猶略而不擧。故銘窣堵波。用彰其徽烈。必後成正覺。當／示獻珠之奇。如未轉女身。且爲散花之侶。其詞曰。／起窣堵波。量有二兮。誕惟輪王。一切智兮。於鑠忍界。光文字兮。／永播芳烈。齊天地兮。／　　開元廿六年歳次戊寅五月十五日建。　張乾愛刻字。／

〔訓読〕

有唐薛氏故夫人実信優婆夷未曾有功徳塔銘并びに序　　朝議大夫守河南少尹東郡杜昱撰并びに書

優婆夷、諱は未曾有。俗姓は盧氏。范陽の人なり。曾祖は義恭、皇朝の工部侍郎なり。祖は少儒、衛州刺史なり。父は広慶、魏州司馬なり。代々冠冕を業とす。詳しくは碑牒に載す。優婆夷、即ち魏州府君有斉の季女なり。夙に成訓を稟け、猗りて柔範を承く。開恵人図に照き、濬敏天性に発る。婉娩を祗しみて以て自ら式り、環珮を鳴らして行有り。展に克家の如くし、実に君子を佐く。李蘭の饋を尸り、採蘋の什を賦す。内は伯姉と睦み、外は六姻と和す。婦功は昌族に爛き、芬誉は衆口に騰る。而して聖善の慈顧、適き来り帰寧す。沈念、慰めに在りて両つながら絶え、旧痾、驤を承けて自ずから愈ゆ。専ら禅門を業とし、用て介祉を滋くす。不空を観じて妄を捨て、無染を寤りて以て心を得。教を承くるの日浅きと雖も、而れども実を見るの理深し。菡若を未だ秀でざるに摧しみ、瓊瑰にして先絶ゆるに泣く。開元

廿六年正月己卯、右脇して臥し、終を城南の別業に告ぐ。春秋二十有二。是の月の景申、神を闕塞の西岡に遷す。礼なり。

優婆夷、髫丱にして智多く、潜識は倫に邁ぐ。事は違わずして同じ、義は然る後に取る。九歳にして人の般若を誦するを聞き、便ち心に暗習し、句に遺言なく、経師の授くるが如し。或る時、僮矇給役し、母兄の、扶罰当に過ぐる有るを見、色を怡げて諫め止め、允に其の中に叶う。宗師の大智、茂んに禅法を修めてより、子の男旧を生む。孩笑娛しむべくも、時疾に遘うに鍾り、遂に夭奪せらる。短長には源有るを以て、置きて問わず。其の情愛を割棄すること、流俗に卓抜す。嘗に諸仏の秘密を以て、式て是れ惣持し、千眼尊勝等の呪を誦し、数、巨億を逾ゆ。則ち声輪字合し、一音を聞くが如し。而して心閑かに口敏にして、更に多字を了す。仮使い金盤転円し、玉壺傾注すとも、たれか厥れ美を尽くさん、未だ能く喩うると云わず。身に羸恙を抱けども、愛語して労を忘れ、資は屢空に迫らるれども、恵施して倦まず。夫れ、其の道を守ること純深にして、戒を奉ずること精一たり。常に居りて静盧乱れず、困に臨みて景行弥いよ高し。是れより先、未だ疾まざるの辰、密かに遺嘱有り。宅の所を卜わしむるに、吾が師に近からんことを要め、曠然として遠望し、以て平昔を慰め、後の人、慈と悼と兼ね極め、敢えて加えざらんことをと。其の殊致豊裁なれど、猶お略して挙げず。故に窣堵波に銘して、用て其の徽烈を彰わす。必ず後に正覚を成じて、当に献珠の奇を示すべし。如し未だ女身を転ぜざれば、且に散花の侶と為るべし。其の詞に曰く、

窣堵波を起てて、量に二有り。誕いなるかな惟れ輪王の一切智。鑠忍界に於いて、文字を光かす。永く芳烈を播き、天地に斉しからんことを。

開元二十六年歳次戊寅五月十五日建つ。張乾愛字を刻す。

（島津京淳）